

こしえるびと

つむぐストーリー vol.117

高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。“黄金の郷”いわて平泉を支える、魅力溢れる“こしえるびと”のメッセージをシリーズで紹介していく。

父が残した稲作を守りたい

絶え間ないせみ時雨の中、藤沢町黄海地内の水田が広がる一画で、千葉信隆さんはドローンを操縦し稲に薬剤を散布する。収穫が終わるまで手入れには余念がない。

一関高専を卒業し、長年エンジニアとしての道を歩んできた信隆さん。農業との関わりは、農繁期に実家を手伝う程度だった。それが2020年、父の啓志さんが突然病に倒れたことで大きな転換点を迎えた。実家には啓志さんが守ってきた18畝の水田と農業機械が残されている。家業を継がない選択肢は信隆さんにはなかった。退職と就農の準備を進めていた22年12月、啓志さんは旅立ってしまう。頼りになる存在を失った中、妻と子を福島県に残し単身帰郷。23年に就農し、信隆さんの米作りへ

の挑戦が始まった。

1年目の苦勞から気づいたこと

「就農1年目はとても大変だった」と振り返る信隆さん。啓志さんの勧めで免許を取得したドローンを活用することで、農業散布を省力化できたかと思えば、広い圃場の草刈りをして腱鞘炎けんせうえんになったこともあった。駆け抜けた1年目の経験から多くの改善点を見いだすとともに、信隆さんはスマート農業への挑戦を視野に入れていく。就農当初から使用しているドローンの他に、自動操舵機能を持つ田植え機や、人工知能を活用した栽培管理システムの導入を考えている。「前職の経験と1年目の苦勞を基に、注力すべきところを検討したい。しっかり手をかけた分だけおいしいものが作れるから」と、信隆

さんは充実感を見せる。

就農希望者を増やしたい

スマート農業の導入に強い意欲を見せる信隆さんには、思い描く未来がある。それは、就農する人、就農したい人がたくさんいる世の中だ。スマート農業には、そんな未来を拓く力があると信隆さんは信じている。「農業は、アナログな作業を泥と汗にまみれてやるものというイメージがまだまだ根強い。通信技術や機械を利用することで労働環境や経営を改善し、農業に対するイメージも変えていきたい」。信隆さんがドローンを操縦していると、目を輝かせて集まってくる子どもたちの姿がある。輝かしい未来への期待を胸に、信隆さんは今日もアップデートを進める。

農業に対するイメージを変えたい

藤沢町黄海 千葉 信隆 さん



PROFILE

千葉 信隆さん (51)
Nobutaka Chiba

藤沢町黄海

1972年藤沢町黄海生まれ。一関高専を卒業後、エンジニアとして宮城県と福島県の企業で約30年勤務し、2023年に就農。水稲18畝。母、大叔父と3人暮らし。

